東方恋魔形(とうほうこいまぎょう)

禁断 ～封印されしみやそー～

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全てを受け入れる地、『幻想郷』。

そう…

変態すらも…

目次

東方恋魔形　～プロローグ～　――　1
東方恋魔形　～1話～　――　4
東方恋魔形　～2話～　――　8
東方恋魔形　～3話　side　アリス～　――　12

東方恋魔形　～プロローグ～

幻想郷の一角地、湿度が高く年中無休でジメジメしている「魔法の森」。
瘴気も溢れ返っており、本来ならば人が住むには適さないその土地には、ある二人の魔法使いが暮らしていた…

バァァァアン!!
ドアが勢い良く開かれる。
そして私の目の前に居る、ドアを開けた短めの金髪少女が口を開いた。
『魔・理・沙！♡　ｓｅｘしよ!!♡』
「くたばれ変態」
開始1ページ目からこんな汚い言葉ばかり飛び交ってすまないな。
私の名前は霧雨魔理ｓ『じゃあ、子作りしましょ!!♡』
「意味変わってねえだろ埋まれ。」
『んもぅ…魔理沙ったら、相変わらず奥手なんだから…
でも、そんな所も好き…／／／』
「そうか、私はお前のそんな所が反吐が出る位嫌いだＺＥ！☆」

私の名前は「霧雨魔理沙」。
幻想郷で魔法使いをやっている。
特技は「異変解決」、
趣味は「他人の物をパク……借りる事」だ。
そして、こっちの奴h『じゃあ、チューでも良いわよ！♡はい、チューー…ぶへっ!?』
こっちの公然猥褻痴女は『アリス・マーガトロイド』
人形を操る七色の魔法使いであり、私にとっての『生涯の天敵』だ。
特技は『セクハラ行為（約一名限定）』、
趣味は『ストーキング（約一名限定）』だ。
私は憎しみと嫌悪を込めて『変態』と呼んでいる。
因みに私が今いる場所は「私の家のトイレの中」だ。
無論、この変態を家に招き入れた覚えもない。
「いや、出てってくれよ！私は今、見ての通りの事がしたいんだよ！」
『安心して魔理沙…私がちゃんと見ててあげるから♡』
「なんでだよ！なんなんだよ！
大体、なんで家の鍵は全部掛けてんのに平然と入ってくんだよお前は!?」
『あら…戸締りをきちんとしてるなんて、流石私の魔理沙ね…／／／

良い私のお嫁さんになれるわ…／／／』

「私は『お前の魔理沙』になった覚えも、『お前のお嫁さん』になった覚えも無いし、戸締りをし始めたきっかけはそうしないと頻繁に私の所有物（主に下着類）が紛失するからだよこのド変態がぁ!!」

『しょ、しょうがないじゃない…魔理沙が可愛すぎるのがいけないんだもん…／／／』

「全然ときめかねぇんだよ！良いから私の下着を返しやがれ!!

そして出ていけぇ!!!」

『はぁ、魔理沙の頼みじゃ仕方ないわね…』

（バサッ…）

『はい…取って良いわよ…／／／』

「私の下着を装着してんじゃねぇぇぇぇぇ!!!」

今日も私の家に怒号が響く。

かくしてこの物語・『東方恋魔形』の華々しい1ページ目は…

「私の家のトイレ」から1歩も進展しないまま、幕を開けた…

東方恋魔形　～1話～

ジリリリリリリリリ!!
目覚まし時計がけたたましく鳴く。
「んぁああ…?あさ…か…?」
湿度が多く、陽の光が入らないここ「魔法の森」では朝でも昼でも夜でも暗い。
時間を問わず眠れると考えれば良い事だとは思うが、この様に時計が無いと今の時間が全く判断出来ないんだＺＥ…ムニャムニャ
私は寝ぼけた顔で階段を降りる。
「ふわぁ～～ぁ……とりあえず顔洗ってから飯か…冷蔵庫ん中なんかあったかｎ『おはよう魔理沙…／／／朝ごはん、出来てるわよ♡』
「ねえ、なんで当たり前の様に居るの?
なんで新婚したばかりの嫁さん面なの?
なんで事後の朝みたいな照れ方してんの?
即刻退去して?
結婚してないけど離婚届にハンコ押して?

後、朝飯はありがとう」

今日も今日とて、猥褻行為を仕掛けてくる目の前の金髪は『アリス・マーガトロイド』。

幻想郷が私への試練として生を与えたとしか思えないド変態である。

『あ、オムライスにハートで私と魔理沙の文字囲っちゃおう！♡

キャッ…／／／私達ったらラブラブ！♡』

オムライスは真ん中から真っ二つに割ってやろう…

そう心に固く誓いながら私は顔を洗いに行った。

蛇口を回して手で水をすくい、バシャバシャと顔にかける。

「うぅぅ～～っ!!さっびぃぃ……!!」

そう呟いた直後、後ろにズシッ…と妙な重さがのしかかる。

水で目が塞がっていて見えないが、その正体が私には察しがついていた。

『シャンハーイ』

「おっ、上海か！ちょっと待ってろ、後で遊んでやるＺＥ！☆」

『ワーイワーイ☆』

のっかっている人形はぴょこぴょこと可愛く手を振ってカタコトな言葉で喜んでいる。

『あっ、コラ上海！魔理沙の頭の上に乗っちゃ駄目でしょ!?

魔理沙の上に乗っていい（意味深）のは私だけなの…／／／』
「よーよし上海、お前は可愛いな♡
お前はいつまでも純粋な人形で居てくれよ。
そこに居る金髪ド変態痴女みたいな汚れた大人にだけはなっちゃ駄目だからな？☆」
『シャンハーイ？』
この人形の名前は『上海人形』。
アリスの作った人形で、可愛らしい金髪に赤いリボンをしている。
アリスは間違いなく…１２０％ド変態だが、
『人形技師』としての腕・『魔法使い』としての才能も疑いようも無く一流なのだ。
私もそこ「だけ」はアリスの事を尊敬している。
『ま、魔理沙…わ、私の事もナデナデして…／／／
そしたら、私もお返しに魔理沙に熱い抱擁を…♡』
「あー、分かった分かった。じゃあ、目閉じてくれ」
『（ドキ…ッ!!）う、うん…んーー…っ♡』
「そんじゃあ上海、一緒にご飯食べようか！
今日は一日中遊んでやるからな！☆」
『ヤッターー!!マリサダイスキー!!♡』

「おう、私も上海の事大好きだＺＥ!!♡」

そんな微笑ましい会話をしながら、私は上海を肩車して居間まで行った。やっぱり可愛いな、こいつ♡

『んーーーーーっ……／／／』

そしてアリスは、その1日を目を閉じて終わらせた。

東方恋魔形　～２話～

オッス画面の前のお前ら！
今日も元気な魔理沙さんだ！
小説を読む時は、部屋を明るくして離れて読まないと駄目だＺＥ！☆
私は今日ｈ…
「ヘックシュイ!!うー…流石にこの季節は冷えるな…」
え？私は今どうしてるのかって？
魔法使いらしく空を飛んでる所だ！
え？行き先？ああ、もう着いたよ！
「おっじゃまするＺＥＺＥＺＥ～～!!☆
う～っさっびぃ～！コタツコタツ!!」
『……寒い。襖閉めろ。』
濡れた靴下を放ってすぐさまコタツに入る私に、
目の前でコタツと同一化しながらお茶をすすっている仏頂面が呟く。
こいつの名前は『博麗　霊夢』。

博麗神社に住むかったるそうな表情がデフォの巫女で、私の親友だ！
「大変だ！霊夢、お客さんだ！お茶淹れなきゃお茶!!」
『ええそうね、麦茶淹れましょう。
あんたの顔面にグツグツに沸騰した麦茶ぶっかける為に。』
こんな会話もいつもの事だ。
大抵ここからは根気比べになる。
『そう言えば、今日はアリスを纏ってないのね』
「あの呪われた装備の話は止めろ…」モゾモゾ…
『良いじゃないの。
肌寒い季節なんだし、お互い裸で温め合ってなさいよ』
「あいつに肌を預ける位なら、私は凍死を選ぶ。」モゾモゾ…
『凄い決意表面ね…』
「ところで霊夢、お前猫でも飼い始めたのか？
なんかさっきから私の足元でなんかモゾモゾ動いてんだけど…」
『いえ、むしろあんたの所有物よ』
「は？何言って…」バサッ…
私は意味が分からないままコタツの毛布を開けt…

『ふへへへへ…♡

魔理沙の適度に湿った生足、良い香りだわ…／／／

ふくらはぎもスベスベで、幾ら頬ずっても飽きないわ…♡

あ…っ！ふ、太股にチューしｔ…あふん!?♡』

私は恐怖と戦慄とありったけの憎悪を込めてコタツの中に潜む魔物に膝蹴りをかました。

カポエラ使いの神に、今だけ…この一撃だけ力を貸してくれと頼んだ。

「なんでここに居る。」

『真に出来る妻と言うのは夫の二歩後ろを歩き続け、影から支える物なのよ…♡』

「真に出来る妻は夫の二歩先に潜み続け、影から猥褻行為を仕掛ける物なのかコラ?」

『ああ、因みにそいつ朝の５時に私の家に来てコタツの中に潜み続けてたわよ。（現在時刻・午前９時３８分）』

「いや、まず止めろよ！

なんで自分家にいきなり押しかけて、コタツの中でモゾモゾ潜む奴を無視するんだよ!?」

『アリスは毎回上物のお土産持って来てくれるし、

お茶も頼めば淹れてくれるからよ』

「ちきしょう！なんだその歪な協力関係！」

『さあ魔理沙！

私とコタツの中なんかよりも、ずっと熱いひと時を過ごしましょう！♡』

「来るんじゃねぇぇぇぇ!!」

ドタバタと自分の周りを走り回る二人を尻目に、

霊夢は「ズズズ…」とお茶をすすり、ほっと一息ついてから口を開いた。

『私とアリスの字幕の区別…どうしようかしらね』

東方恋魔形　～３話　ｓｉｄｅ　アリス～

『ふっふっふ～ん☆』

……あら？もう始まってるのかしら？

オホン…御機嫌麗しゅう☆

私の名前はアリス。

『アリス・マーガトロイド』よ。

可憐且つ優美に人形を操る都会派の魔法使いで、

人は私の事を『七色の魔法使い』と呼ぶわ…☆

え？随分御機嫌そうだって？

ふふふ、貴方良い着眼点をしてるわね！

そう、今日は…

今日は……！

魔理沙が家に来る日なのよ!!♡♡

ああ、愛しのマイスウィートラブリー魔理沙…♡♡

本当なら私の魔理沙の事も貴方達に余す事なく伝えてあげたいのだけれど、
魔理沙の魅力を語るのなら、この小説の上限文字数（１５０００文字）を全部使っても、１割も伝え切れないの…だからまたの機会にさせて頂戴…♡
思えばここまで色んな道のりを歩んで来たわね…／／／
私の影から（※個人差があります）のアプローチ…♡
いつも魔理沙は照れ屋さん（※個人差がｒｙ）だから、
恥ずかしがって私の思いを避けてしまうけれど…
ああ…！
遂に今日、魔理沙が私の愛に応えてくれるのね…！♡♡
テーブルの上には既に私の愛の手料理がセットしてある…
魔理沙の好物は既にリサーチ済みよ…♡
更には魔法で保温もバッチリ…何時でもあったかい料理を振る舞えるわ！
で、でもどうしましょう…！
「料理も美味しそうだけど、私はそれ以上にアリスが美味しそうに見えるＺＥ…♡」
なんて言われたら…!!♡
予めシャワーを済ませておいた方が良いのかしら…／／／
い、いえ、むしろ魔理沙と一緒に入って、あんな所やこんな所を洗い合いあった後に

然るべき展開に…
『ふへ…ふへへへへ……♡♡』
『シャンハーイ?』
『……ハッ!!
ふ、ふふっ…私とした事が取り乱してしまったわね…
さあ、上海!
貴方もこれから、おめかしさせてあげるからね!☆』
『シャンハーイ!!♡』
目の前で両手を振って喜んでいるこの子の名前は『上海』。
私が手塩にかけて作ったお人形で、
娘同然の存在なのよ…♡
上海の髪を櫛でときながら、私は今か今かと魔理沙を待ち続けている…
あぁ…これぞ恋する乙女の至福の時…♡
そんな事を考えていると…
コンコン
『来たっ…!?』
ドアをノックする音が聞こえた。

私はこの瞬間、
マッハ５００かつ最短のルートでドアまで行き…
『待ってたわよ魔理沙ーーッ!!
お腹空いた!?♡
ご飯出来てるわよ!!♡♡
今日は熱い一夜を過ごしましょう!!♡♡♡』
ドアノブを開け、
ドアの前のマイスウィートハニーに熱烈なハグと愛の頬擦りをした…
ああ…♡
いつもは全力で避けようとする魔理沙が今日は私の愛を受け入れて…
…あれ？いつもと感触が違うようｎ「アリス……、重い」
『れ…っ!?
れれれれ霊夢!?』
目の前に居たのは私の愛しの人ではなく…
眠そうな目をした、紅白のリボンと服を装着している巫女…
「博麗霊夢」であった…

『うわぁあああああん…っ!!』

そう、私は泣いている…

家中のハンカチを全て消費するレベルで号泣している…

朝の天界にまで昇る程の陽気なテンションは、

今や地霊殿を突き破る勢いで下降している…

目の前の上海が頭を撫でて慰めてくれる…優しい…（泣）

「ガツガツ…別に良いじゃない…ムシャムシャ…治った日にまた…ゴキュッ!!ゴキュッ!!…改めて会えば…ズルルルルルルゥ!!」

テーブルに座り、私が魔理沙の為に作った渾身の手料理を容赦なく貪り食いながら霊夢は言う…

そう…魔理沙は風邪を引いてしまったのだ…

今日の魔理沙との愛の営みは中止となった…

しかし私にとって重要なのはそこではない…

いやそこも十分に重要なのだけれど…

私ははそれを聞いた瞬間、光速を超える勢いで魔理沙の看病に向かおうとした…しかし…

「あぁ、ついでにもう１つ言伝で、「そう言う事だから、悪いが今日は会えなさそうだ。

後、今日はお前の相手をする気力が無いから絶対に私の家に来るな。看病とかいう体でも来るな。本当にキツいから。フリじゃないから。来たら絶交するから。」だそうよ。」

『なんで…わだしが看病にいっぢゃだめなのよぉおお…っ!!（泣）』

「風邪が悪化するからでしょ」

『そんな訳無いでしょ!?

私の愛情たっぷりのお粥と、

全身余す事ない揉みほぐしマッサージ（意味深）と、

献身の密着添い寝があれば魔理沙の風邪なんてたちどころに治るはずよ!!』

「分かった!!

分かったから顔近いって!!!」

『それなのに…

ぞれなのにいいいいいい!!（泣）』

「はぁ…しょうがないわねぇ…

どうせこの後魔理沙ん家に看病しに行く予定だから、

お粥位作るんなら魔理沙に届けてあげるわよ。」

『……え?

霊夢貴方…この後魔理沙の看病をするの!?』
「めんどくさいけど、本人に頼まれてんのよ。
放っておいて死なれても寝覚めが悪いしね。」
『な…なんで…!!
なんで私がダメで貴方が良いのよぉぉぉぉ!!（泣）』
「いや、こっちだってめんどくさいのよ…」
『れいむのばがぁぁぁぁ!!
あほぉぉぉぉ!!
どろぼうねごぉぉぉぉ!!（泣）』
「百歩譲って前二つはまだしも、
泥棒猫は止めなさい泥棒猫は!!」
『うわぁぁぁぁぁん!!（泣）』
「あーもう!!
こっち向きなさいアリス!!!」
『う…うぅ…っ！（泣）
ぐすっ……』
「じゃあこうしましょう！

私が今日看病に行った時に、
魔理沙のマスクをかっぱらってくる…！」
『…っ!?』
「ふっ、流石はアリス…気付いたようね…」
『ま、まさか霊夢…貴方…!!』
「アリス、あんたの親友として私はあんたの恋（セクハラ）に力を貸してあげるわ！
魔理沙の風邪でビショビショになった唾液たっぷりのマスク…
受け取りなさい!!」
『れ……っ！
霊夢ぅぅぅぅぅ!!（泣）
私、貴方と親友でよがったぁぁあああ!!!』
ガシィッッ!!
２人は熱い抱擁を交わす…
決して断ち切れぬ絆の形として…
そう、人はこれを……

『友』と呼ぶのだろう。

２日後…

『ゴホッ！ゴホッ！

ああ、これが魔理沙の菌なのね…♡

私は今、魔理沙と１つになっている…

そう…

これはＳＥＸにも等しい行為ｎゴホッ！ゴホッ！』

～お　し　ま　い～